

境界の祭祀、鎮守の祭祀

— 三州岡崎城下投町菅生八幡宮をめぐる —

細井 岳 登

はじめに

元禄十三（一七〇〇）年、岡崎城下投町（現岡崎市若宮町）の鎮守菅生八幡宮の神主が首になり、町を出ていくことになった。この事件が、この神社に筆者を惹きつけた。神社の名称からして、疑問を抱かせる。何故投町の鎮守が、他町名の「菅生」を冠しているのか。また祭神は、徳川家康の長男信康であるという。父親は各地の東照宮に祀られているが、信康を祀る例は他に聞かない。「鎮守」を歴史的存在として、吟味する必要があると感じた。

萩原龍夫は、中世末から近世初に、本来性格を異にする氏神・鎮守神・産土神の融合が進み、村の守り神などの地縁的な神として祀られるようになったとみる。また地縁的集団による祭祀である氏子制は、郷村制と関連し、近世封

建制下の村落で、諸観念を完備していったとしている^②。

菅生八幡宮の創建とその役割の変化にも、祀る主体の形成、変化が関係している。逆に八幡宮の祭祀を通して、祀る主体である投町という近世の地縁的社会的特質が浮かび上がってくる。町の役割について、町に住む商人・職人の職業形態から論じられている^③。神職という特殊な職種の住人を取り上げると、町はどのように映るだろうか。

本稿ではまず鎮守と町の成立を跡付け、次いで神職をめぐる事件を通して町と鎮守の関係を問い、そこから町の特質を見ていくことにする。

一、菅生八幡宮と根石原

1、伝承のなかの菅生八幡宮

菅生八幡宮は、松平信康の霊を鎮めるため、天正八（一

五八〇）年に八幡を勧請したことに始まるという。信康は武田勝頼への内通の疑いをうけ、同七（一五七九）年八月岡崎城を追われ、三州大浜などを経て遠州二股城に移され、九月十五日に自害し、同地の青瀧寺に葬られたとされる。

信康一件は、『朝野旧聞哀藁』でも綱文を立てており、採録された諸書の記すところである。しかし菅生八幡宮の創建と信康の関係については、官選の史書類にはみられず、三河地方の地誌や由緒書の類に見られるのみである。

文化三（一八〇六）年の奥付の『若宮八幡宮由緒記』（以下、由緒記と略す）には、次のように記されている。

騰雲公並築山君二首、信長実検終、被遷之、于時神君在於岡崎城、命葬於岡崎城東根石原観音林、天正八年石川伯耆守為岡崎城代時、岡崎鳴動以故尊称若宮八幡宮^③

二股城で自害した信康の首と、八月に浜松で殺害された母親築山殿の首は、信長の元へ送られて首実検された後、根石原の観音の林に葬られたが、翌年「岡崎鳴動」というような怪異が起きたため、若宮八幡として祀ったという。〔若宮〕とは御霊の神で、非業の死を遂げた者の霊を、祟りを鎮めるべく祀ったものだという。根石原は、近世の投町、欠村の辺りを指す地名で、戦国期の史料にも登場する。

天保二（一八三一）年の写本などがある『根石原若宮八

史苑（第五五巻一号）

幡興本之記』（以下、興本之記と略す）では、

信康公御首ヲハ清水丹波受ケ（略）東根石原庄観音境内ニ埋ミ、御廟ヲ築キ記シニ松ヲ植ヘ、（略）（御母君築山殿モ）御自害アリケレハ、（略）御遺骸ヲ則チ浜松西来院ヘ送葬シ、御廟ヲ築キケリ、（略）然ニ斯ノ両殿ノ死靈御崇リ甚シク、岡崎城内申ノ刻ヨリ種々妖怪有りテ、上下ノ侍士出入スル事ヲ得ス、城代モ城内ヘ入ル事叶ス、剩ヘ悪病、闘争万ノ災難変化シテ諸凶異多カリケレハ、万民胆ヲ冷シ、（略）大神君上意シテ、此時仏霊ニ幣帛ヲ捧ゲ、祭礼神楽シ奉リ、御母公ヲ神明ト勧請シ、信康公ヲ若宮八幡宮ト敬奉リ、御牌所東谷寺観音前ニテモ懇ニ御追薦ノ作善ヲナシ玉ヒケル（後略）^⑤

と記す。祟りをなす怨霊を神として祀ることにより、その魔力を利用して災厄除けとする、御霊信仰にもとづいた話の展開である。祟りの描写が細かく物語性が附加されているが、信康の首を根石原の観音の境内に埋葬したとあるのは同じである。ただし由緒記では築山殿の首も一緒に埋葬されたような書き方で、『三國聞書集』も「岡崎菅生八幡宮之社内に在之御廟ハ両殿之御首也」と記すが、興本之記では築山殿の首については触れていない。また信康を八幡として、築山殿を神明として祀ったとし、埋葬者や祭祀の

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

対象には異同がみられる。

神明について『菅生村遊伝寺由来記』（以下、由来記と略す）は、次のように記す。

三郎様築山様之御恨之怨靈有之と沙汰し、因茲忠功之御譜代衆御亡魂之御鬱憤を為散、於根石南北四十間を隔て、南に信康様若宮八幡と奉勧請、北に築山様を神明と奉勧請、南北に両社有之、其頃北之神明之森は遊伝寺寺内にて則社僧仕候、

築山殿を祀る神明は、八幡と四十間を隔てて、遊伝寺の境内に勧請されたとある。遊伝寺は天文年中柴田新四郎の創建とも、天正七年新四郎の二男が出家して開基したとも伝える。由来記によると、正保三年（一六四六）岡崎藩主水野忠善による足輕屋敷拡張のため、遊伝寺は両町へ、神明は欠村の山へ移転させられたという。由来記には首の埋葬について触れておらず、興本之記でも「御首実見ヲ願ケレハ、大神君御機嫌宜シカラス」と家康の首実見を伝えるのみである。また徳川方の記録や官選の史書には、首実見の話は登場せず、『信長公記』では信康の自害にも触れていない。彼らの首実見を史実とする、確証はない。

『岡崎東泉記』（以下、東泉記と略す）は、勧請について別の由緒を伝える。

天正七年ノ比岡崎三郎信康公、同御母築山殿生害ニ付、

信長公・家康公ヨリ御吟味アリ、御家中親子方迎 家康公信長方、信康公ハ勝頼方也、御家中勝頼公逆心無之旨身血ニテ起請文ヲ書申込、投付、但其比頃ハ大塚村ト云、此観音之前ニテ書ケリ、今ノ東之方田之処其頃野ニ而、此所ニテ書シ、其後三郎信康公同御袋築山亡魂、御城へ色々ケザミアリシ、諸寺院ニ而御祈念御弔アリシカシツカナラス、此時観音堂森之内ニ若宮八幡ヲ勧請被申達、御袋様ハ四十間北ニ神明ヲ勧請申奉リ候へハ、終ヲサマリ、此以後若宮八幡トモ云、

東泉記は、現菅生町の満性寺末寺の東泉坊教山が、貞享く元禄頃の調査で確かめた史料や、地域に伝わる話などをもとに著したものである。東泉記でも信康や築山殿の埋葬については、記すところはない。信康と根石原（投）の観音堂が結びつくのは、信康が武田勝頼に通じたため、家臣が勝頼に（家康の誤りか）叛かない旨を誓った起請文を観音の前で書いたとされる点にある。

『家忠日記』の天正七（一五七九）年八月十日条には、自家康岡崎江越候への之由、鶴殿善六郎御使にて岡崎江越候、各国衆信康江内音信申間敷と、御城きしやう文候

とある。家康から国衆に岡崎城への登城が命じられ、信康に内通しない旨の起請文を城内で書かされている。起請の

事実が、場所を根石原に変えて東泉記では語られている。この伝承の鍵は、様々な由来によって結びつけられる、根石原という場所にあると考えられる。

2、根石原における境界の祭祀

中世の人々の怨霊をめぐる観念として、異郷の地に憤怒の裡に生を終えた者は、御霊となつて故郷へ帰ろうとし、望郷の念が強いほど、他方その人物の帰郷を阻んだ障害が大きいく、御霊としての力も一層強大なものとなると想像されていたという^⑬。伝承のなかで怨霊として立ち現れ、鎮魂のため祀られることになる信康もまさに、自らの治める岡崎を逐われ、異境の地で悲運のうちに死んだ例といえよう。そのような例として、享徳元（一四五二）年みやこへ帰りたいと語った弁慶の霊が籠もったとされる石が京に運ばれるという事件が起きるが、石が祀られた三条京極は、洛中と洛外の境と意識されていたといわれる^⑭。

天正三（一五七五）年の大岡弥四郎の謀反をめぐる『三河物語』の一節に、根石原が登場する^⑮。

「（前略）然ば、押寄て打奉、家康・信康御親子様之御首級を、念し原にかけ可申候」と、ありくくと書付て、大賀弥四郎……と書とめて、勝頼へ上ければ（後略）

弥四郎をバ、高手小手に縛め、絆をはかせて（略）楽・鉦・笛・太鼓にて打はやして、浜松へ連れて行く。然る処に、念し原に、女房子共五人、張付にかけておく処を、弥四郎を引通して、やりすごして見せければ（略）^⑯

根石原は、信康・家康父子の首を討ち取って架けるべき場所として、さらに謀反が露見して連坐させられた妻子五人の張付けの場所として登場する。どちらも処刑など死に関わる場所として描かれている^⑰。著者大久保彦左衛門にとっては、同時代の事件である。少なくとも根石原は、処刑の舞台になりうる場所という認識はあったといえよう。中世において処刑は、河原や村や町のはずれなど、境界的な場所で行われていたとされ、根石原も境界的な場所であったことを窺わせる。

また菅生八幡宮の西、二百メートルほどのところにあった朝日神社は、朝日山根石神社ともいわれ、根石原の地主神であったと思われるが、近世初頭まで行われていたという御衣祭で、岡崎の地に古くから祀られていた稲前神社の神輿の巡幸地の一つとされている。この巡幸地は戦国期の岡崎の城下領域の四至を示すと考えられる。

一方八幡宮は「菅生」を冠し、また根石原の北に創建された大泉寺も「岡崎内菅生大仙寺」と記されている^⑱。また

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

慶長九（一六〇四）年の「菅生村之内満性寺領検地帳」に、「なくり」と記した地字名がみられ、投が菅生の内とみなされていたことが窺える。^{①②}これらから根石原は、中世の菅生郷域に含まれ、菅生郷および同郷を領域を含む岡崎の境界の地であったとみられる。

東泉記などでは八幡の勧請された地には、既に観音堂があったと記す。社地は段丘の突端に位置し、南は川岸の崖で、東も社地の端で数メートルの段差になっている。観音の多くは山の中腹や崖の上、海岸の岬に営まれたとされる。^{③④}観音が建てられるには、適地といえよう。

岡崎城の主であった信康にとって、菅生郷は帰るべき故郷であり、根石原は東の方、遠州で無念の死を遂げた信康の怨霊が入ってくる場所と、故郷の領民たちに想像されたであろう。そのような点で根石原は、怨霊を祀るにはふさわしい場所で、八幡が祀られる以前から、外から来る災厄を防ぐ境界の祭祀が営まれていたと思われる。

3、境界に生まれた町

十六世紀後半、境界の地根石原に町場が形成されていく。

（伊豆之相雲）駿河之国今河殿の明代トシテ、（略）

一万余にて西三河エ出る。（略）（先手ハ）岡・大平に陣ヲ取。明ければ、大平河を打越、念志原エ押上、岡

崎之城ヲバ、二連木ヲ押ニ置、甲山ヲ押て通り、伊田之郷ヲ行過て、大拾寺に本陣を取れば、（後略）^⑤

これは永正三（一五〇六）年の北条早雲率いる今川軍の侵攻を記した『三河物語』の一節だが、現大平町は右岸なので、「大平河を打越」したという記述と食い違うが、現大西町あたりを指すと考えれば、無理はない。^⑥今川軍の動きを、どこまで忠実に伝えているかはともかく、著者大久保忠教の三河在住時代の十六世紀後半には、このようなルートが存在していたと思われる。

中世の東海道は、岡・生田から乙川左岸を進み、大西から明大寺へ出て、六名で矢作川を渡ったという。しかし『三河物語』で描かれた乙川を渡って根石原から現在の岡崎城近辺に至る道や、丘陵部を越えて北へ向かう道も主要なルートであったとされる。また道根往還と呼ばれる額田郡桜形方面と結ぶ、現在の東公園付近から入る道が通じていた。この道は鎌倉時代には、高氏の所領を結ぶ幹線道路であったとみられている。^{⑦⑧}根石原は交通上の分岐点であったようだが、根石原に押し上るといふ表現は、単に地理的、地形的な様子を描いたにすぎないのであろうか。

大永六（一五二六）年の、現大和町の浄土真宗高田派妙源寺へ買い戻した土地を寄進するという証状に、根石新四郎忠次なる人物が名を連ねている。^⑨投の西隣の欠町の太

子堂は根石山浄専寺と号し、天文年中に柴田新四郎の創建とも伝え、境内に柴田一族の墓があるという。同寺は妙源寺末寺であったので、新四郎忠次も柴田一族とみられる。

『柴田氏家伝』には「柴田新四郎正則、延徳三年辛亥伊賀国上野ヨリ来リ、奉仕清康公、大永二年壬午ヨリ天正十七年己丑マデ三代ノ間欠村領主ナリ」とある。また欠の真宗大谷派法光寺の本尊は、享禄五（一五三二）年の裏書をもつ阿弥陀木像で、その頃の創建とみられる。大永から天文の頃には、これらの寺の創建に関わった真宗門徒など、根石原に居住者がいたことが窺える。

ところで永禄の頃には、岡崎城を守るための拠点が整えられていたといわれる。北は能見、南は中世東海道の渡河点の六名、東は乙川の渡河点の大平や岡、根石原である。大平には「郷侍」「郷足輕」と呼ばれた下級武士が百人ほど配置されたといわれ、近世の東海道沿いに本多氏などの城跡がみられる。『岡崎旧記』の記す欠の「七人衆」は、一人は山城国で、他は額田郡、碧海郡の出身とされ、本領としての居住ではない。東泉記の屋敷の書上げでは、松平孫右衛門、松平玄蕃、野々山七左衛門が根石原と記されている。松平姓の者たちは、惣領家より屋敷地を与えられたとみられ、やはり地付きの者ではない。遅くとも一向一揆平定以後、東方の防衛拠点として根石原には、政策的に配

置された大小の武士の屋敷が、かなり存在していたと思われる。『三河物語』の描写には、そのイメージが、重なっていたのかもしれない。

このような軍事的に或いはまた宗教的にも、外敵を防ぐ役割を賦与された境界の地は、市の立つ場でもあった。

根石原新市之事、三ヶ年之内諸役令免除、但於三ヶ年過者、自余之如市可致諸役、彼市場住宅之輩者、縦借錢物才雖有之、三ヶ年之間者不可沙汰之、彼市場之事、每事左近左衛門ニ申付之上者、永不可有相違者也、仍而如件、

永禄九年丙子年

権現様

正月九日

御諱御書判

本多左近左衛門殿

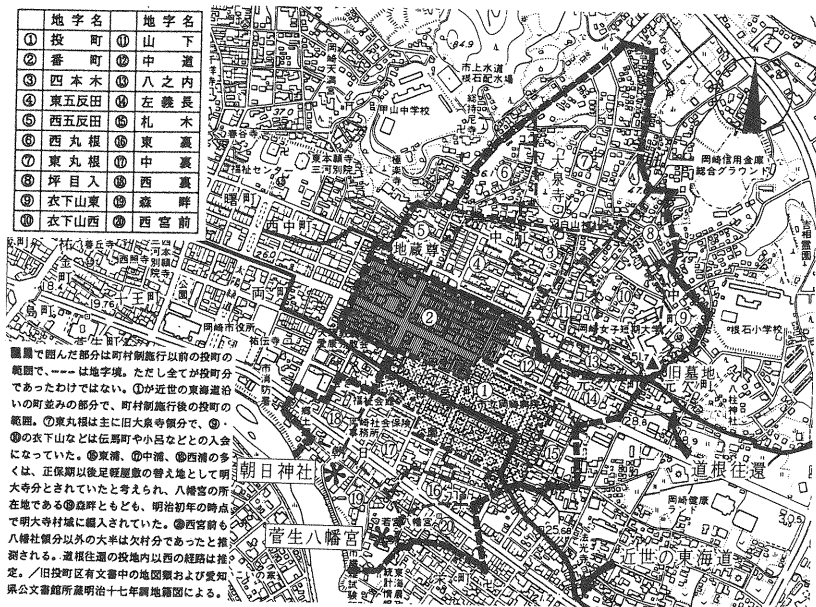
これによると、市での商売において賦課される諸役を三ヶ年免除するだけでなく、市場に居住の者については、三ヶ年は借金返済猶予を認めるなどの優遇措置をとって新市を開設しようとしたことが窺える。これは根石原周辺における武士の集住による消費の増加に対応するため、優遇策によって市場への定住の促進を図ったと思われる。新市開設にあたっての諸役免除は珍しくはないが、集住という軍事的背景にもとづいた施策といえる。もっとも鎌倉期以来の道などが交差する交通上の要地であったので、集住以

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

前から市が開かれていた可能性はある。当地の真宗系寺院で創建を、大永から天文頃とする伝承がみられるのは、その頃に商工業者の移住があったことを推測させる。

家康、信康時代の岡崎城下は、戦国期城下の特徴を示していた^⑩。根石原の市場や能見大手口の市場など、城の周辺に点在する流通の拠点に依拠して、城を中心とした領域支配の核を成立させていた^⑪。ただし領主との関係は一樣ではなく、満性寺周辺の市や町は独立性、自立的傾向を強く持っていたのに対して、根石原の場合、新市は領主の開設であり、領主との結びつきは強い。この点で根石原は、城下の構成要素として「城郭を中心に、その凝集力のもとに衛星上に展開」したものといえよう^⑫。

根石原において町場が形成された場所については、地名が手がかりになる。投町の延宝二（一六七四）年の検地帳や明治十七（一八八四）年の地籍図には、「番町」という町場的な地名がみられる（明治の時点では中村の地内^⑬）。番町は延宝の検地帳では、「一番町」「二番町」「三番町」と分かれており、全て畑地である。その当時屋敷地は東海道沿いに展開しており、この地名は近世の集落地を指す呼称ではない。番町の東隣りの字は「中道」という道地名で、さらにその東は「左義長」という境界的な字名である。字左義長の東端に接する字衣下山東一番地は、現在は高野山



近世の投町域および地字境復元図

大師教会となっているが、明治十一（一八七八）年の地券では、投町区有の墓地となっている³⁴。また現在、かつての字番町の北西の境に接する位置に地藏寺がみられる。

ところで鎌倉期以来の道根往還の道筋は、欠町字石ヶ崎の八柱神社（旧神明社）の南を通って、字左義長から字番町へ至たっていたとみられる。この道筋が、弘治二（一五五六）年の文書に大泉寺の四至として、「南者限往復道谷台末迄」或いは「みなミハ海道をきり」とある往復道、海道にあたると考えられる。海道と称されることから、十六世紀半ばにおいても、額田郡山間部と中世東海道と矢作川の交わる菅生郷近辺を結ぶ主要道であったとみられる。

その街道筋にあたる字番町付近に、町場集落が形成されており、境界を示すランドマークの名残が、墓地と地蔵ではないだろうか。そこが新市開設にともない、他所から移住してきた「市場在宅之者」たちによって、形成された町と考えられる。当時は士商未分離の混住状態と考えられ、番という単位は軍事的な編成と関係あるのかもしれない。慶長九（一六〇四）年の満性寺領の検地帳で、名請人の居住地を示す協書に「なぐり」という記載がみられることから、それ以前に集落としての投が成立していたことは確かである。戦国期の投町、あるいは原投町といえるであろう。

4、菅生八幡宮の創建

一方、菅生八幡宮が、慶長のはじめ頃以前には創建されていたことを伝えるのが、次の史料である。

其神領之事

合式石五斗也

右之寄附被成所也、於神前国家安全之御祈念不可有懈怠者也、仍如件

慶長六

伊奈備前守

丑二月十日

忠次

す郷

八幡領³⁵

これは旧投町区有文書中に伝わっているもので、『参州岡崎領古文書』に同文の文書が、「投町庄屋共指出候菅生八幡江御寄附状写」と注記されて収載されている³⁶。現存のものは、石高のところの黒印や、忠次の花押がなく写である。慶長六（一六〇一）年には、三河、遠江を中心に忠次の寺社領証文が多く出されている³⁷。岡崎地域の寺社では、二十点余が確認されているが、この他『寛永郷帳』記載の寺社は、伊奈の証文が発給されたとみられている³⁸。

岡崎城下町廻りでは能見の神明社が「御朱印地」とされ、極楽寺持の城内白山社、菅生天王社と菅生八幡社が領主よ

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

りの「拝領地」とされている。これらの神社は中世創建の伝承をもち、寛永十七（一六四〇）^④年作成の『郷帳』にも、各々の高が記載されており、近世初頭には存在していたとみられる。八幡宮領の安堵状の正文は現存していないが、他の朱印、拝領地寺社の例からみて、慶長六年に社領安堵の証文を受けたとみてよいであろう。

遊伝寺の由来記によれば、「因茲両宮に少々之神領被下候に付、遊伝寺儀、寺内并森寺領共収納相統仕候」とあり、八幡や神明が勧請された際、若干の所領が与えられたという。その結果寺内・寺領を相続したと伝える遊伝寺は、天正十六（一五八八）年に、岡崎城代本多重次による「五十歩一之御手形」による寺社領安堵を受けたと記す。田中吉政による寺領没収の憂き目にあったが、慶長六（一六〇二）年、伊奈忠次によって五十歩一の手形をもとに、「寺領并寺内森共如前々拝領仕」とある。その後、

慶長九年参河惣検地被仰付、米津清右衛門殿被参、（略）其節遊伝寺并若宮八幡宮と一帳に被遊水帳被下候共、御断申上、遊伝寺は別に御帳申請（略）と記す。遊伝寺領の慶長九（一六〇四）年の検地帳は、『岡崎市史第七巻』に採録されており、同年の菅生八幡宮領検地帳も写が、旧投町区有文書に残されている。^{④⑤}ただし

慶長六年の安堵状は、「菅生八幡領」のみのもので、別個

の寺社であったことは確かであろう。にも関わらず遊伝寺

地種・地位	地積	反	畝	歩	名請人
上	畠	5	1	8	遊 伝
上	畠	0	1	8	遊 伝
居屋敷	敷	1	0	2	遊 伝
屋 敷	敷	1	0	0	彦 一郎
合 計	1	反	8	畝	0
分	米	2	石	3	斗
			4	升	4
				合	3
				勺	

表 1：慶長九年遊伝寺領一覧

地種・地位	地積	反	畝	歩	名請人
下田	5	0	6		万五郎
上畠	1	1	2		又 助
上畠	5	2	0		清太夫
上畠	1	0	0		藤 蔵
下畠	0	0	5		清太夫
上畠	3	0	7		清太夫
下畠	1	0	1		清太夫
下畠	2	0	3		清太夫
合 計	1	反	9	畝	2
分	米	2	石	2	斗
				8	升
				6	合

表 2：慶長九年菅生八幡領一覧

と八幡宮の検地帳が一括されたところのは、一括しうる関係にあるという認識が、役人側にあったからであろう。

遊伝寺については、五十歩一の手形や伊奈の安堵状そのものは確認されておらず、由来記の裏付けはとれない。慶長の検地帳で、寺名と同じ遊伝なる人物が名請けしており、慶長年間をさほど遡らない頃に創建された可能性もある。そうすると時期的に八幡や神明の勧請に関係していた可能性もでてくるが、確定しうるだけの材料を欠く。

一方八幡宮については、勧請のうちに社領を与えられたという記述も、年次も定かでない具体性を欠いている。また五十歩一の手形の話に八幡宮は登場せず、その頃には創

建されていたといえるだけの証拠は、見い出せていない。

徳川氏領国時代に、怨霊騒ぎや鎮魂の為の勧請が行われたのであれば、徳川氏側にも何らかの形で記録されたのではないだろうか。当時者が事件をめぐる話に介入できなくなった時、伝説として生命を吹きこまれるのであろう。怨霊をめぐる伝説の成長は、天正十八（一五九〇）年の関東移封で、関係者がこの地を離れて以降のことであろうと思われる。所領没収などの政策への批判や、災害を被った怒りや恨みの矛先が、時の領主に向けられたりしたことが、伝説が生みだされる契機となったのかもしれない。非業の死を遂げた、岡崎（菅生郷）の領主信康は、怨霊に仕立て、想いを託すにはうってつけの人物とみなされたであらう。

慶長九年の満性寺領の検地帳に、「なくり」の万五郎の名がみえる。投町の草分けといわれ、庄屋も務めていた清水家では、近世にも万五郎を名乗る者がおり、同家に連なる者であらう。同年の菅生八幡領の検地帳の、下田一筆五畝六歩の名請人万五郎は同一人物と思われ、八幡宮との関わりは窺える。しかし東泉記は八幡宮を勧請した人物に触れておらず、興本之記は清水氏蔵とあるので、割引いて考える必要がある。清水氏や遊伝などが単独で創建にあたったとは考えにくい。怨霊の噂が広まるなかで、近在の住民たちが勧請を求めて、行動を起こしたのではないだろうか。

宗教者の関与が中心になった人物がいたかもしれないが。

こうして勧請された八幡宮の場所は、戦国期の町場から離れて、しかも町場から見おろす形で位置している。また勧請が伝えられる年代には原投町が存在していたとみられるのに、社名に投を冠していない。これらを踏まえると、創建時には、投町の鎮守であったとは考えにくい。投の住人が祭祀の中心になっていったにしろ、投町のみを守る神として勧請されたものではないのであろう。投町と菅生八幡宮は、ともに菅生郷の境界という場所の特性から生まれた双子の兄弟のような関係ではあるが、その始まりは町と鎮守という一組のものとして誕生したわけではなかった。

創建をめぐる伝承が、地誌・由緒書の類のみにみられるのは、八幡宮の付近で生まれ、岡崎城下内外で語り伝えられていたローカルな伝承だからであらう。ただし東泉記では「御城へ色々ケザミアリシ」と、祟る矛先が岡崎城にのみ向けられているが、興本之記では「諸凶異多カリケレハ、万民胆ヲ冷シ」と、祟る範囲が「万民」にまで広がるという、内容の変化がみられる。これは祭祀の謂れ、意味付けが、祀られる者に即して語られたものから、祀る側に即したものに変わったことを示しているのであろう。これには祀る集団の変化や、祀る人々の意識の変化が関係していると思われる。すなわち領主の怨霊を神として祀る領域の境

界の祭祀から、町を守る鎮守の祭祀への変化である。

二、近世の町と鎮守

1、岡崎城下投町の成立と八幡宮の鎮守化

鎮守が存在するには、守るべき対象の存在が前提となる。字番町付近の町場集落は、慶長年間以前には成立していたとみられる。しかし慶長く寛永にかけての時期は、投と隣の欠との空間的な区分は、明瞭ではなかった。慶長の検地では、投四十三石余、欠二百八十石余あったといわれ、寛永十七（一六四〇）年成立の『寛永郷帳』では、投が二十三石余で、欠が三百六十三石余となっている。投と欠で土地の帰属が、確定していなかったであろう。

投町は寛文四（一六六四）年の『岡崎郷領内在々之名』に町廻りとして高が記載されており、慶安二（一六四九）年の岡崎藩の総検地を受けて城下町廻りに編入されたとみられている。『寛永郷帳』では投村として、本多伊勢守分の町高とは別に記載されており、妥当な見解であろう。従って字番町付近にあった原投町から、近世の東海道沿いに家屋敷を移転したのは、慶安二年までの間と考えられ、遊伝寺の移転などが伝えられる正保三（一六四六）年頃の可能性が高い。こうして近世投町の景観が出現した。

石高は「在々之名」では、九十五石四斗九升九合で、延

住所	地字・地番	地種	地積	反	畝	歩	地券発行日
中村字西丸根	71	田		7	1	5	明治11, 5, 20
欠村字西宮前	27	田		1		9	明治11, 12, 3
明大寺村字森畔	14	田			2	5	明治11, 5, 20
明大寺村字東浦	11	畑	1	6	1	6	明治11, 5, 20
明大寺村字中浦	28	畑	1	4	1	8	明治12, 1, 15
明大寺村字森畔	3	畑		3	1	7	明治11, 5, 20
明大寺村字東浦	9	原野		9	1	6	明治20, 10, 4
(合 計)			5反3畝	2	6	歩	

表3：明治期の若宮八幡宮所有地一覧

宝二（一六七四）年の検地によって百六十二石二斗五升七合の本高が確定した。この時の検地帳が基本台帳となっており、この頃が近世投町の成立を考える場合の下限といえよう。屋敷地以外は畑高のみで、うち七十三石が綿作である。また町廻りに入ったが、年貢負担とされ、地子免許になっていない。享和の書上では百十八軒のうち六十七軒が農民で、商売では茶屋十二軒、たばこ屋五軒、綿商四軒等の業種がみられ、特定の同業者のみの町ではない。このような場所が、城下の町として扱われることの意味を、問い直す必要がある。

立していたことは、確かである。

一方菅生八幡宮は、慶長六（一六〇一）年伊奈忠次の安堵状を有し、近世を通じて二石五斗が拝領地として認められている。知行の区分上では、投町とは別の

独立した存在であった。いつ頃から投町の鎮守として意識されるようになったか、明らかではない。近世投町が成立するのにもなったことであろう。寛文四（一六六四）年の銘の手水鉢が寄進されており、その頃には鎮守とみなされていたのであろう。

慶長九年の検地帳では八幡宮領は合計一反九畝二十四歩であるが、明治九（一八七六）年の「社領上地々所限反別書上」の投町元黒印地上地反別では、二反七畝二十三歩となっている。また若宮八幡宮を所有者とする明治の地券の地積合計は五反三畝余で、慶長時点で認められた社領分以上の土地が、八幡宮用として年貢地の中に設定されていた。投町の鎮守として、これらによって神社の維持・運営がなされていたのであろう。もっとも慶長の検地帳の登録地が、社領として固定されていたとは限らない。

2、神主清太夫立退一件

元禄十三（一七〇〇）年、町内に住む神職の間で問題が起き、神主の一人が、町を立ち退くという事件が起きた。

差上ヶ申一札之事

一私儀只今迄清太夫と組合ニ而御座候得共、清太夫儀不見居者ニ而御座候故、向後組合を離、何れ之組江成共組申度候、右之通願可為申上一札仍如件

史宛（第五五卷二号）

朝日

元禄十三年辰ノ七月十三日

左膳印

高宮加兵衛殿

松野尾左次兵衛殿

差上ヶ申一札之事

一清太夫儀前廉左膳と組合ニ而御座候処、今度左膳儀ハ当町七右衛門と申者之組江入申候、清太夫義不見届者ニ而御座候故、町内ニ組合申者無御座候、縦清太夫町内へ組合申度旨願申上候共町内同心不仕候間、為其一札差上ヶ申所如件

元禄十三年辰ノ七月十三日

投町中 連印

高宮加兵衛殿

松野尾左次兵衛殿

奉願口上之覚

一私儀兼而朝日佐膳と組合罷有候処、今度佐膳私と不仲願申上ヶ投町之組合ニ入候、私儀茂投町之組合ニ入候様ニ投町江相願候得共、町内ニ組合候者無御座候、私前々不届故町内ニ組合之者無御座と存、何方へ恨可申様無御座候、然上ハ私所之住居不能成候間立退申候一私養父市太夫、実父又兵衛と合聲ニ而御座候ニ付、

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

兩人相談之上市太夫所江養子ニ引取申候、私如斯立退
申上ハ市太夫娘兩人并拙者実父母弟又次郎、右五人之
者共養育可仕様無御座迷惑至極ニ奉存候、因茲養父市
太夫娘ニ跡式被下置候ハ、右又次郎末々女合、市太夫
社職相続仕若宮之掃除等為仕度奉願候、御慈悲ニ被仰
付被下候ハ、難有可奉存候、以上

元禄十三年辰ノ七月廿日

清太夫 印

連尺町年寄

兵右衛門殿

清左衛門殿

安左衛門殿

朝日社の左膳の一札によれば、彼は菅生八幡宮の神主清太夫と組を組んでいたが、清太夫が「不見届者」――何をしでかすか見当がつかないというぐらゐの意か――であることを理由に、組を解消して別の組に加わりたい旨を藩の役人に願ひ出ている。そして投町中よりの一札では、左膳を投町の七右衛門の組に入れたことを、藩の方へ伝えている。

一方清太夫の方は、彼が「不見届者」であることが、当事者である左膳の一方的な主張ではなく、投町の人々も認めるところであつたとみえる。町内で一緒に組を組む者はおらず、たとえ清太夫が組を組みたいと願ひ出ても、町として認めない旨を藩へ届け出ている。

「組」は、いわゆる五人組に相当するものであろうが、組の解消で帰属が問題になっているのがこの二人であることから、これ以前は神職二人だけの組であつたことが窺える。しかも清太夫から城下の町年寄宛に出された口上之覚によれば、左膳が入ることを認められ、清太夫が認められなかつた組は、「投町之組」と記され、神職二人の組は投町内の組とは区別されていたようである。すなわち彼らは投町の他の住民と組を組んでおらず、住民一般とは区別される立場にあつたことになる。

ところで「不見届者」というのは、ある人物を勘当・帳外にしようとする際に、その理由を示す表現として使われている。清太夫の場合、他の史料では「諸事不勤故」組に入れないと説明しており、勤めを果たさなことで問題になっていた。それを「不見届者」と表現しているのは、個々の問題を越えて、清太夫という人物自体が、町の組に入れるにはふさわしくないとみなされたからであらう。

口上之覚によれば、組に入れないということは、町内に居住できないことを意味した。組に入ることが身元の保証を意味したのであらう。「不見届者」に対しては、身元を引き受ける者もなく、町を出ていかななくてはならなかつた。そして清太夫の立ち退きにより、残された一家五人が食べいていけなくなるという。立ち退きは、神職でなくなる事

を意味し、それは家計を支える収入源を失うことも意味した。清太夫一人の問題ではなく、一家の死活問題であった。それに対して清太夫は、養父市太夫（神職の先代）の娘に「跡式」を相続させ、弟又次郎をその娘と結婚させて「社職」を相続させたいと願ひ出ている。清太夫自身養子のためか、直接弟に家督を相続させず、あくまでも先代の娘が相続する形をとっている。婿取りを前提としており実質的に家を代表するのは婿となる又次郎であるが、相続のあり方に、家における血縁の強さと、家督と家職の理念上の区別が窺える。七月二十八日付の又次郎の口上之覚で「養父市太夫娘之儀如在仕間敷候」とわざわざ書き記しており、神職の相続は市大夫の娘と結婚して婿養子となることによって認められるものであった^⑤。

また同史料では、「諸事町内之衆中致相談若宮之掃除等念入万事相慎相勤可申」とあり、何事によらず町内の者に相談し、神職としての勤めを果たすことを誓約している。町の側も七月二十日付の町年寄宛の口上之覚で、「町内組合ニ入悪事等不仕様諸事申合為相勤可申」と、不始末をおこさないよう、身元引き受け先である組のメンバーと意志疎通を図らせるとしている^⑥。又次郎の神職の相続の条件が、神職家との関係で言えば、神職の「家」の者となることであり、町内との関係で言えば「組合ニ入」ることであった。

神職に限らず、職業が家業としてある社会において、職に就くためには家に連なり、同時にそれを承認し、保障する町一組に、連ならなくてはならなかった。この一件の結果、それまで投町の住民とは区別されされていた神職家の者が、他の住民との協調と職務の遂行を条件に、町の住民としての扱いを受けることになった。

又次郎を組に入れることを承認した主体であり、又次郎が諸事を相談すべき対象は、「投町衆中」と表現されている。二十日付の口上之覚に、庄屋とともに署名している「投町惣代」は、「衆中」を代表する立場で、後述の史料に見える「産子惣代」に対応するものであろう。清太夫が「又次郎ヲ組合ニ入、諸事申合取立可申旨被申候間別而忝仕合ニ奉存候」と、本音はどうであれ、謝意を述べており、衆中が町の意志決定の主体であることを物語っている^⑦。衆中という言葉から、意志決定が住民の総意としてなされるべきものであったことが窺える。藩に願ひ出るといふ手続きを取っているが、藩の指示や町の行政職たる庄屋の意向で決まるわけではなかった。この衆中の決定によって町を出ることになった清太夫の、その後を語る史料はない。

3、神領と神職家の経済基盤

清太夫立退一件で菅生八幡宮の神職を相続した又次郎が、

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

享保十九（一七三四）年神職を辞することになった。

譲証文之事

菅生八幡領

高合式石五斗也

右者我等身上不如意ニ罷成神職相動不申候ニ付、為渡世各相談之上八幡領并社森、都而不残伊奈備前守様御寄附御証文共、其町庄屋中江譲渡シ申候、御役替有之候者跡役庄屋中江可被引渡候、如此相定候上者我等子々孫々ニ至迄、取戻候願一切申間鋪候、勿論横合曾而申分無御座候、為後日証文仍如件

譲り主

享保十九甲寅年正月

山田又次郎

松応寺門前

証人実父 長右衛門

岡崎投町

御庄屋衆中

組頭衆中

右之通証文取候ニ付写奉差上候、当町ニ而支配仕神領者、宮修復年ニ正・五・九月ニ御祈禱入用仕、町内助成ニ者曾而仕不申候、以上

投町惣代 七右衛門

享保十九甲寅年正月廿六日

庄屋 万五郎

高宮伊兵衛殿
都筑勘兵衛殿

同 甚兵衛

又次郎は健康上の理由で、神職を勤めることができないので、神領と境内地を庄屋中へ譲渡するとある。そして八幡宮に関する証文類は、庄屋が替わることになるに次の庄屋に引き継ぐこととしている。証文の宛所に「組頭衆中」も記され、また藩へ提出する写の添え書きの差出が「投町惣代」とあることから、町（衆中）が庄屋中への譲渡を認めたものである。それまで専従の神職によって管理されてきたものが、町の了解のもと、庄屋中が実際の管理にあたる方式になったといえる。

神職が神社を譲渡できるところに、町と神社の微妙な関係が現れている。町は鎮守の神職の相続を左右する権限を有しているが、鎮守社は独立した存在として、神職家から譲渡される対象でもあった。この譲渡により、町による鎮守の支配が直接的なものになったといえる。むしろこの時点をもって投町の鎮守として確立したとみれないこともない。しかし又次郎の神職の相続にあたって町年寄宛の口上之覚で町の側が、「若宮之掃除等為仕度」と八幡宮の維持・管理にあたらせることを求めており、既に八幡宮が投町の鎮守と意識されていた故の町の意向といえよう。

ただしあくまでも経費は社領から賄うものとされ、しかも社領の収納の実務は、庄屋が行っていたのではなかった。

奉願上口上書之覚

一旧八幡社領之儀、從來艸高式石五斗之处、取米高与相心得、是通書上仕候得共、全私共不心得ニ而、右式石五斗者、小作預ケ之納ニ而、地主より取立候取米ニ而者無御座、是通之趣意、大相違ニ相成候条、誠ニ以申訳次第も無御座候、何卒御支配地々統免^{左不願之取御勘并被成下置ニ而}ヲ以、御上納仕度候様、厚御憐愍^⑧ヲ以、御聞済可被成下置候様、偏ニ奉願上候、已上

投町

庄屋中

浅井六三(印)

明治四辛未年十月

天野松二郎

深田三太郎

民政

御役所^⑧

浅井以下の庄屋たちは黒印高二石五斗を収納高と思ひ違ひをしていたという。それというのも社領分は、地主からではなく、小作に出していた分から収納していたため間違だとし、今後は藩領と同様の租税率で納めれるようにしてほしいと願ひ出ている。

史苑(第五五卷二号)

たとえ小作に出した土地であっても、町内の年貢分の場合、庄屋が収納額を分らないでは済まないであろう。投町域の、町の住民の所有地であっても、社領分はあくまでも独立した所領として、投町分の算用とは別々に行われていたのではないだろうか。少なくとも幕末頃には、社領分の算用に庄屋たちは直接関与していなかったため、思い違ひをしていたのではないだろうか。それが享保年間の譲渡以来のことかどうかは、定かではないが、明治四(一八七二)年の八幡社御祭典・御修復料書上帳によれば、諸費用を高二石五斗の内訳として書き出しており、基本的に拝領地をもとに維持・運営がなされていたのであろう。

では神職の生活の基盤は、どのようなものであったのか。清太夫及びその養父市太夫、弟の又次郎の名前は、延宝二(一六七四)年の岡崎領投町検地帳の原本や、享保三(一七一八)年の検地名寄帳ともに見られない^⑧。しかし正徳二(一七一二)年の人別帳除ヶ願には「当町若宮ねぎ又次郎借家金左衛門」とあり、借家を持っていた。また延宝の検地帳の写で、原本が現存していない部分の末尾に、組を解消した「朝日」と並んで、屋敷地一反四歩の名請人のところに「矢師屋敷」と記されている^⑧。慶長九年の八幡宮領の検地帳には屋敷地は記載されておらず、「ヤシ」という音から縁日の「香具師」が連想され、八幡宮の神職家の

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

ことかとも思われるが、断定するに足る手がかりはない。ところで慶長の検地帳で、全八筆のうち畠地五筆一反二畝余の名請人が清太夫である。同名というだけでは、神職とは断定できない。ただ同年の遊伝寺領の検地帳では、上畑二筆全てと屋敷一反余の名請人の遊伝が、寺の坊主と思われることから類推して、慶長の検地帳の清太夫が神職であ

地種・地位		地積 畝 歩	延宝二年 名請人	享保以降名請人
屋敷		3 畝 0 6 歩	朝日	元高
上 畠		0 畝 1 2 歩	朝日兵右衛門	屋敷／若狭
上 畠		3 2 5	朝日兵右衛門	屋敷／若狭
上 畠		0 0 4	朝日兵右衛門	屋敷／若狭
	分 米	5 斗 6 升 7 合 6 夕		
中 畠	三番町石畑	4 畝 1 0 歩	本兵衛	朝日
上 畠	三番町	3 1 2	庄屋	朝日
上 畠	二番町	4 1 3	長兵衛	朝日
	分 米	1 石 4 斗 9 升 5 合		
合 計		1 反 9 畝 2 2 歩		
	分 米	2 石 0 斗 6 升 2 合 6 夕		

表 4：朝日社家名請地一覧

* 延宝二年地帳写、享保三年名寄帳より作成

あった可能性はある。社領の名請人として、年貢免除の自作地を生活の基盤としていたのかもしれない。このように大きな経済的基盤を有しておらず、町の承認によって相続が認められる神職というのは、地域の有力者の系譜を引くとは考えにくい。社殿の番人としての「宮守」や、

清掃に当る「掃除人」として雇われた形で、出発したような者であったのかもしれない。

一方朝日社の場合、除地四斗一升六合が、水野中善によって与えられたとされる。延宝二年の検地帳の写を見る限り、延宝二年時点では屋敷地三畝六歩と畑地三筆を名請している。このうち屋敷地については、地積の脇に「元高」と記され、畑地は何れも地積右脇に「屋敷」、左脇に「若狭」と記されている。若狭は文化年間前後の朝日社の当主と思われる、畑地三筆分が屋敷地となっていた。

享保三（一七一八）年の名寄帳では、屋敷地一筆、上畑二筆、中畑一筆の計四筆を名請しているが、屋敷地の四畝十一歩は延宝検地帳の畑地三筆分の合計に相当する。享保の初めまでには、屋敷地が移っていたことが分かる。名寄帳の畑地三筆は、延宝の検地帳では何れも他の者の名請地で、一反二畝余の土地を増やしたことになる。この屋敷地と畑地三筆の分米が、計二石余となっている。名寄帳の末尾に「右之内四斗壹升六合 朝日ニ被下」と記されており、四筆は町の石高の内として年貢を懸けられ、あらためて総高より四斗余が与えられていた。年貢負担者として登録されている点では、投町の一般住民と同じであった。

近世社会の安定に伴い、神職は地位を固め、制度上の保護を得て発言権を増したといわれる。延宝時点の朝日社家

の当主名は兵右衛門で、神職として高い地位にあったとは思われない。その後の当主名には神職らしい名乗りがみられ、土地の獲得による経済力の向上も、地位の向上を目指す意識の変化に一役買ったであろう。しかしあくまでも名請地については年貢を負担する、町の住民であった。

4、神職の取り立てをめぐって

その朝日杜家が、又次郎の辞職以後、専従の神主のいなくなった八幡宮の神事を勤めていた。

奉差上口上之覚

一（略）八幡宮之神職断絶之後当所朝日山社人相頼神祭相務来申候然処四年以前巳年々右朝日山社人伊織、町内之以為惡鋪疎遠ニ相成、夫巳・午・未三ヶ年天神宮之神主八百次相頼幣注連相納、前々之通九月十五日神祭相務申候、投町江引請支配仕候処凡四十三ヶ年程ニ相成、（後略）

投町

申八月

庄屋 五郎兵衛（印）

同 大 助（印）

御奉行様

御役所

この申年は、享保十九（一七三四）年に山田又次郎から

史苑（第五五巻二号）

町が八幡宮を譲り請けてから四十三年目の安永五（一七七六）年と考えられる。口上書の前半の部分で、「伊奈備前守様御寄附御墨印」の安堵状や山田又次郎よりの「譲り証文」を「写シ差上申」と述べており、おそらく「庄屋々ハ七ヶ年目々ニ御上様江一札差上来申候」とある、定例の書上の類であろう。これによると八幡宮の神職断絶後は、朝日山の社人伊織に頼んで神事を執り行ってきたが、安永二年に伊織との間がこじれて、同年から前年までの三カ年は、岡崎天満宮の神主に頼んで祭礼をおこなったとある。神事祭礼を主催しているのは町であり、神事を勤める役を誰に依頼するかは、町が決める事柄であった。

ところで天明二（一七八二）年に、「諸社之称宜等装束并吉田之許状等之儀ニ付御書付」が出されている。その中で専従の神職のいない村持ちの神社などで神事祭礼が営まれており、「御條目之御趣意」を弁えないとして問題になっている。この方針が後に、投町に突きつけられることになる。しかしこの口上書は、「御書付」発布以前に提出されたものであり、町が八幡宮を「引請支配」することが、問題になっているというニュアンスは感じられない。

一 札

一 菅生八幡宮神主享保年中退轉之後者、相定候神主無御座候ニ付、自然と不敬ニ茂相当産子恐入候ニ付、貴殿

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

相頼候間、於神前天下太平国家安全之祈念ハ勿論、其外月々三日ニ至迄無御懈怠御勤可下候、然上ハ町内々々々其手柄為聊共為謝礼寄附可致候、猶又御神前之鍵等出入之節、御不自由ニも可有之候ニ付、合鍵預置申候、右之通相違無御座候、御頼仍如件

享和三癸亥年

正月

庄屋

万五郎 印

同

甚之助 印

町内産子惣代

組頭

清六

菅沼若狭殿^⑦

こ宛名の若狭は別の史料では左膳の子とあり、伊織との関係は不明だが、朝日社の後継者である。伊織の代に町との折り合いが悪く、神事を頼まなくなっていた同家に、享和三（一八〇三）年から再び依頼することになった。若狭には謝礼だけでなく、不便であろうからと社殿の合鍵を預けて、神殿そのものへの出入りは自由にさせている。

この頃吉田家は、白川家との門人の帰属をめぐる争いなどから、神祇道取り締まりのため、寛政九（一七九七）年梶山加賀守を三河に派遣した。村持ちの神社についても、

村役人を呼び出して、吉田家への入門、身分相應の許状を受けるよう働きかている。若狭に神事を依頼することにしたのも、専従の神主を置かず不敬にあたるからと述べており、天明二年の「御書付」や寛政九年の取り締まりが、関係しているであろう。一方若狭も寛政九年に許状を受けており、吉田家の権威を後ろ盾として地位の向上を図っていたと思われる。さらに文化十二（一八一五）年にも、許状を受けない者の取り締まりのため雑掌が派遣され、十三、十四年にかけて神職の帰属問題が激しくなった。そして菅生八幡宮でも、神職の任用をめぐる問題が持ち上がった。文化十三（一八一六）年とみられる子正月付で、岡崎の北郊、伊賀八幡宮に置かれた吉田家の出役所宛に出された「口上書之覚」で、投町の庄屋は次のように述べている。

一菅生八幡宮神職之義即答ニ相立候儀難相成候故、只今迄之通御神前勤向之儀神職相立候迄ハ町内支配若狭ニ申付御祈禱可為致候、若狭ニ相任候義町内一同不承知ニ奉存候、以上^⑧

これによると、専従の神主を置くまでは「町内支配」の若狭に祈禱をさせるが、若狭に任せることは町内一同承知できないとある。祈禱はさせるが任せないとはどういうことなのか。何が問題になっているのであろうか。

口上書之覚

(組頭新蔵) … 出役所ニ而被仰聞候趣左之通

一菅生八幡宮之儀、此間庄屋甚七江申し渡し候通神職相立候歟、但若狭江諸事相任候歟、右之答ニ罷出候哉与被仰候故左様ニ御座候、町内一同談事仕候処神職ヲ相立候義即答ニ者難相成候、神職相立候迄者若狭江相頼神前勤向之義可仕旨申上候処、直ニ若狭御呼出被成神前勤向之儀万端諸事其方江相任候与有其趣相意得取計可致様被仰候故、イヤ左様ニて者無之候、神前御祈禱向之義者若狭江相頼候得共、御供物之義者は迄先規町内ニ而仕来申候故、以後茂町内ニ而仕立若狭ニ清メ備貫度町内一同之願ニ御座候与申上候得者、左様之儀不相成候、平人穢之身分として御供物仕立候義不心得至極左様猥之事故此度相改ニ廻ル、此間茂甚七ニ申聞候ニ未不行届弥々若狭ニ相任候哉相任候義難相成哉、何レ書附ニいたし明朝迄ニ差出申候様被仰候

右之通被仰候故有増之処口上書ニ而奉申上候、以上

投町庄屋

子正月廿六日

大 助

同 甚 七[㊤]

出役所から意向を「町内一同」で話し合った結果を、庄屋の代わりに組頭の新蔵が出役所に出向いて伝えた際

史苑 (第五五卷二号)

りとりが記されている。出役所側が、新たに専従の神職を置くのか、それとも若狭に任せるのかと問い糺しているのに対して、町の意向としては、今すぐ神職を置くことは出来ない。それまでは若狭に「神前勤向」はしてもらうが、それは全てを若狭に任せるというのではなく、祈禱は若狭に頼むが、供物のお供えは是迄どおり町の方で行い、若狭に清めてもらいたいというのである。

出役所側は「吉田家之許状を請すして神職ニ無之義取計ふましきハ御触之内ニ籠て有る」と、天明二年の再触れに背く行為と見なしている。これに対して町の側は、山田又次郎絶家の後は朝日山に頼んでおり、怠りはないとし、また「御供物之義ハ天明二年之御触ニ神職ニかきると申義ハ相弁不申候」と述べ、供物を供えることは再触れに違反しないと主張している[㊤]。神事を執り行う主体は町であるという、町側の論理が窺える。又次郎の譲渡以後、八幡宮が町の直接の管理下に置かれたいたことを、如実に示している。これに対して吉田出役所の方は、「平人穢之身分」が供物などを取り扱うのはよくないので、取り締まりに廻っているのだという。それをいまだに解っていないとして、若狭に任せるのか任せないのかの返事を、翌日までに書面に認めて差し出すようにと言いつづけている。

返答を迫られた投町は、次のように答えている。

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

口上書之覚

一町内談事仕候処外ニ書附ハ得不仕候、并私共ニ於ても古来之義書附ニて差出候様被仰而茂、先役取計之義者得書出不申候、何程六ヶ敷義被仰候而茂此間御目ニ懸申候書附外ハ書附と申而ハ不仕候、此段内々奉御伺候、以上一此度之一件於私共ニ甚心配仕罷有候、然処若狭義ハ私共支配之者ニ御座候、日々伊賀御出役所江出席乍致此度之一件町内私共江何之申出茂一向無之候ハ、同人不心得歟共被存候、右之段内々奉御伺候、以上

子正月廿八日

吉良長太夫様⁸³

投町庄屋

甚 七

これによると、先日述べたとおりの町内で決まったこと以外に書きようがないとし、神職の扱いについての先例についての書付の類も、先日提出したものより外にはないと、出役所の要求を悉く拒否している。さらに次の一つ書きで若狭を「私共支配之者」であるとして、その若狭が出役所に日々出入りしながら町の方に何も知らせないのは不届きであると、暗に出役所と若狭の結託を非難している。町の側の「私共支配之者」という表現から、神職に対する位置づけが読みとれ、又次郎の相続の際の、町に対する誓約の重要性、必要性が浮き彫りとなる。町の住民であるという

ことは、生業に関しても町の規制を受けることを意味しており、神職家であっても同様で、個々の家を越えた、自律的な主体としての「町」という存在の重みが感じられる。

そして、「御上様江御願申候て絶家いたし候故」、藩主に伺いを立てなければならぬという町の側の返答を、出役所側も受け入れ、藩主の裁定を仰ぐことになった。⁸⁴明治四（一八七二）年の八幡社御祭典・御修復料書上帳に「当社町持ニテ神職無之」とあり、結局、専従の神職を置くことも、若狭に全面的に任せることもせずに、明治維新を迎えたことが分かる。大区小区制のもとで、菅生八幡宮の敷地は、明大寺村に編入された。それでも八幡宮は若宮神社として、現在に至るまで投町若宮町の鎮守である。一方朝日社は、明治の初めに平田派の門人となった菅沼真澄が、愛知県の神社界で活躍した。明治二十八（一八九五）年彼が没し、敷地が明大寺村域に入っていたためか、明治四十三（一九一〇）年明大寺の六所神社に合祀された⁸⁵。その跡地には、往事を偲ばせるものは何も残されていない。

おわりに

本稿では、「鎮守」の祭祀を歴史的に位置づけながら、それらを祀る社会の形成やその特徴をみようとした。菅生八幡宮は、もともと町の鎮守として創建されたものではなかつ

た。菅生郷の境界を守るための神が、その境界に町が成立し、町を守る神へとその役割を変えた。しかし史料の限界から、変化の時期、過程を明確にはたどれなかった。

清太夫一件を通じて、神職が町の支配に組み込まれる様を、さらに又次郎の譲渡により、神社そのものが町の直接の管理下におかれたことをみた。高壁利彦は、神職が鎮守の神主として村落を氏子圏として掌握していたと指摘しているが、投町の場合、神職の方が町によって掌握されることとなった。また同氏は、氏子が鎮守の維持のため、神職の認可を得るよう協力をした例を紹介しているが、投町では鎮守が町のものであるゆえに、吉田家の介入に抵抗している。鎮守との関わりは、町・村、神職、吉田家の三者の間に^⑧対立が生じる要素をはらんでいた。町や村の神職が吉田家に連なることが、ただちに町や村の神社自体の神道への編成を意味しない。自律的な町のもとで、鎮守は町の固有の信仰対象であった。

近時、都市史研究や身分制研究で、町人・商人・職人・身分等の文字を、順列組み合わせ的に「Ⅱ」でつないだ説明を目にする。町の住民としての神職を、どのように位置づけるのか。朝尾直弘は町による町人身分の決定を論じ、町を家屋敷・財産・信用の共同保全を目的とした共同組織と位置づけた。^⑨吉田伸之は商人型の町人にとって、個別売

場の共同保全と市場空間の共同所有が、町への依存を不可欠にしたと論じた。^⑩しかし鎮守の神職の相続・就任にあたり、町の承認を必要しているように町の共同保全機能が個々の家、住人を制約する面にも注目するべきであろう。

町の外に目を向ければ、岡崎城下の町の一つの町である投町が、独自の鎮守を有すること自体である。城下には、菅生天王社、岡崎天満宮という二大鎮守があった。それらと投の住民との関わり、城下全体の中での投町の位置づけなどは取り上げられなかった。投は特異な例かもしれない。しかし城下とそれを構成する町の間に走った断層として、両者の関係のある側面が露出するかもしれない。

それらの考察は、投の鎮守への旅の範囲を越える。信康をはじめ旅の導きたちを安息の地へ帰し、稿を閉じたい。

註

(1) 岡崎市菅生町。同町には「菅生」「元菅」の字名があり、また鎌倉時代創建の浄土真宗満性寺がある。同町付近が中世菅生郷の中心であったと思われる。菅生郷の範囲や岡崎の城下領域の形成については、別稿「中世の郷から近世の都市へ」『立教日本史論集』六／一九九五、一で考察を加えた。あわせて参照されたい。

(2) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』（一九六二）第七章

(3) 吉田伸之「都市と農村、社会と権力―前近代日本の都市性

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

- と城下町」(『アジアから考える』一九九三)
- (4) 『岡崎市史第七巻』P161
- (5) 『日本民俗事典』「若宮」
- (6) 岡崎市立図書館に二種類の写本のコピーがあるが、内容の異同はない。表紙あるいは附言の前に「龍城下投町清水万五郎之藏、文化迄投町居住当時矢作邑藩居」と記されている。また岡崎藩の漢学者松下綱煥(一七七一一一八四九)の附言が記され、「寛永十三年大学頭林信正識」とあるのは後人の書き加えであろうが、これをもって本書全体を疑うべきではないとしている。
- (7) 『日本民俗語辞典』「御霊」等
- (8) 『岡崎市史第七巻』P458~459
- (9) 『岡崎市史第七巻』P456, 460
- (10) 内閣文庫蔵本/同じく教山筆の『三河東泉記』(史料編纂所蔵、旧額田郡役所蔵本)も、ほぼ同内容である
- (11) 『家忠日記』(臨川書店) P49~50 (12) 山本幸司「崇徳御怨霊伝小考」『月刊百科』三二七/一九八九
- (13) 瀬田勝哉「弁慶の入洛(上・下)」『月刊百科』三五七、三五八/一九九二
- (14) この事件を記録している諸書には、弥四郎を大賀姓としているものもあるが、『新編岡崎市史』P927では、後世の作爲を感じ、地元史書の記述に従うとしている。
- (15) 『三河物語』P124, 126
- (16) 東京記でも、大岡弥四郎事件に連座して、「根石原父子五人斗はり付にあがり」と、父子は母子の誤記であろうが、やはり礫の場所として記されている。

- (17) 『岡崎市史第七巻』P80
- (18) 「大泉寺文書」一(『新編岡崎市史六』所収一九八三)
- (19) 「三州額田郡菅生之内満性寺領検地帳」(徳川林政史研究所蔵)／帳の端が欠けているため、筆数などは確定できない。
- (20) 『国史大辞典三』「観音堂」
- (21) 『三河物語』P22~23
- (22) 永禄七(一五六四)年の徳川家康の安堵状に、「太平郷三木名□□大西海向寺領之事」とある。「大西」が現大西町周辺とすれば、乙川左岸の同町周辺も「大平郷」の内ということになる。(『高隆寺文書』二『新編岡崎市史六』所収)
- (23) 『新編岡崎市史二』(一九八九) P1074~77「愛知県歴史の道調査報告書」四・六
- (24) 「妙源寺文書」二一(『新編岡崎市史六』所収)
- (25) 『岡崎市史第三巻』P306~307『岡崎市史第七巻』P516~518, 565~587
- (26) 『新編岡崎市史一』P863~864, 1141
- (27) 『岡崎市史第三巻』P308
- (28) 「内閣文庫『譜牒餘録』所収文書」二七(『新編岡崎市史六』所収)
- (29) 桜井英治「市の伝説と経済」(『都市の中世』一九九二)によれば、中世において市の商人は、複数の市を移動する存在で、市に最初に根を下ろした住人は、商人宿や問屋、酒屋など市に来る商人を相手とする職種が主で、町場形成後も定期市は解消しなかったという。
- (30) 戦国期城下の特徴については、市村高男、小島道裕などの研究が参考となる。また仁木宏が「戦国期城下町から織豊期

城下町へ」(『年報都市史研究』一／一九九三)等で、近年の研究動向を総括し、問題点を指摘している。

- (31) 岡崎城の大手先に市場という字名があったとされるが、諸書により比定地が異なり(『岡崎市史第三卷』P236同『第七卷』P488等)、具体的な位置は明らかになっていない。

- (32) 吉田伸之「都市と農村、社会と権力」

- (33) 「旧投町区有文書」ア一六三、ア一六八(若宮八幡宮蔵／文書番号は『新編岡崎市史』編纂にあたっての調査で作成された目録による。ただしア＝冊物、イ＝一紙物、キ＝近代文書は、筆者が便宜的に用いた符号である)／地籍図は愛知県公文書館蔵

- (34) 同年を中心とした地券が、「旧投町区有文書」の近代文書の未整理分の中にみられる

- (35) 「大泉寺文書」一、二(『新編岡崎市史六』所収)

- (36) 「旧投町区有文書」イ三五

- (37) 内閣文庫蔵『参州岡崎領古文書』一五(『新編岡崎市史六』所収) 所載のものには、忠次の下に「御書判」と記され、幕府による寛保三(一七四三)年の調査時点では、正文が存在していた可能性がある。ただし岡崎領古文書所載のものにも、黒印についての記載はなく、他に例がないわけではないが、なお検討を要する。

- (38) 『伊奈忠次文書集成』(一九八一) P338～329

- (39) 『新編岡崎市史三』(一九九二) P111～112

- (40) 『岡崎市史第五卷』 P49～50

- (41) 『岡崎市史第七卷』 P461

- (42) 「旧投町区有文書」ア一六七

史苑(第五五卷二号)

- (43) 『新編岡崎市史三』 P207～208

- (44) 『岡崎市史第三卷』 P225,227,310／岡崎藩領の郷帳の石高は、本多氏が慶長六(一六〇一)年に拝領した太閤検地高とされる。(『新編岡崎市史三』 P260～261)

- (45) 『新編岡崎市史三』 P195,287／「在々之名」は、徳川林政史研究所蔵とされているが、所在不明のことで、原史料での確認はできなかった。

- (46) 『岡崎市史第五卷』 P49～50／ただし同『第三卷』(P236)では、投町が伝馬役負担ではないため、寛文十一(一六七二)年に伝馬役が城下の惣町負担となって以降に、町廻りへ編入された可能性もあるとみている。

- (47) 「明治十七年調地籍図」(岡崎町、中村、欠村、明大寺村)(愛知県公文書官館蔵)、キ六一「貢租、地価目録」、無番号「額田郡投町」字界図(明治十七年以前)

- (48) 享保年間以降、本高は百六十五石七斗九升四合(『岡崎市史第三卷』 P229)

- (49) 『新編岡崎市史三』 P219

- (50) 『岡崎市史第三卷』 P233～234

- (51) 吉田伸之は、町人と村方の宿場の伝馬役負担者の異同を論じているが、町方の年貢負担者と百姓との異同も検討すべき問題であろう(『近世の交通支配と町人身分』『中世史講座』一九八二)。また地子免許とされた町方の屋敷地には、元々石高がなかったのではという渡辺信夫の問題提起は、年貢負担地の位置づけを考える上で、考慮すべき指摘であろう。(『近世都市の基本問題』『近世日本の都市と交通』一九九二)

- (52) 「河聴視録」(『岡崎市史第七卷』 P157)

境界の祭祀、鎮守の祭祀（細井）

- (53) 『旧投町区有文書』キサ三―三（近代文書の未整理分の表示用の符号として、便宜的に「キサ」を用いる）
- (54) 『旧投町区有文書』近代文書未整理分
- (55) 『新編岡崎市史七』四八―イ（旧投町区有文書」イ一八八／以下の史料番号四八の文書番号は同じ）
- (56) 『新編岡崎市史七』四八―ロ
- (57) 『新編岡崎市史七』四八―ハ
- (58) 町年寄は、町奉行の意を受け、町々の庄屋や宿の間屋を指揮・監督する職掌で、連尺町の住民から選ばれていた。（『新編岡崎市史三』P198～199）
- (59) 堤通手永大庄屋長嶋家「弘化四年未日記」等
- (60) 『新編岡崎市史七』四八―ホ
- (61) 『新編岡崎市史七』四八―ホ
- (62) 『新編岡崎市史七』四八―ニ
- (63) 『新編岡崎市史七』四八―ヘ／秋山國三「近世京都町組発達史」（一九八〇）第三章では、年寄等の町役の管掌事務の一つとして、家督相続等の公証事務をあげている（P206～212）。投町の事例をみる限り、相続の承認は理念的には住民の総意にもとづくべきものと意識されていたのではないだろうか。
- (64) 『新編岡崎市史七』四九（旧投町区有文書」イ一五〇）
- (65) 『新編岡崎市史七』四八―ニ
- (66) 『旧投町区有文書』イ一五九
- (67) 『旧投町区有文書』ア一五五
- (68) 『旧投町区有文書』ア一六八、ア一六九
- (69) 『新編岡崎市史七』二二―イ（旧投町区有文書」イ一二一）
- (70) 『旧投町区有文書』ア一六三

- (71) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』第六章第三節
- (72) 『三州岡崎管内記』（『新編岡崎市史八』五六）
- (73) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』第六章第三節
- (74) 『新編岡崎市史七』五〇―イ（旧投町区有文書」イ一五〇）
- (75) 『新編岡崎市史七』五〇―ハ（旧投町区有文書」イ一五一／以下の史料番号五〇の文書番号は同じ）
- (76) 『徳川禁令考前集五』二五四六
- (77) 『旧投町区有文書』イ一五八
- (78) 『新編岡崎市史七』五〇―ハ
- (79) 『新編岡崎市史一』P1104～17
- (80) 『新編岡崎市史七』五〇―ロ
- (81) 『新編岡崎市史七』五〇―ニ
- (82) 『新編岡崎市史七』五〇―ハ
- (83) 『新編岡崎市史七』五〇―ホ
- (84) 『新編岡崎市史七』五〇―ハ
- (85) 『新編岡崎市史一』P1194
- (86) 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』補説二「近世の村と寺社」一九八九
- (87) 朝尾直弘「近世の身分制と賤民」（『部落問題研究』六八／一九八一）ただしここで町が決定しているのは、直接には町の住民として認めるかどうかという点であり、その時点ではじめて町人身分であることが確定するものであるかどうか、検討の余地があろう。
- (88) 吉田伸之「都市と農村、社会と権力」

本稿は、一九九三年度の岡崎市学術研究奨励制度の研究費助成

を受け、市へ提出した報告書の一部を加筆、修正したものである。
若宮町の宮総代の武田さんをはじめ、多く方の御世話になったこ
とを記して、謝意に代えたい。

(立教大学 大学院史学専攻博士課程後期)

立教大学史学会会則

一九八一年十一月二十九日改正

第一条 本会は立教大学史学会と称する。

第二条 本会は事務所を立教大学文学部史学科研究室内に置く。

第三条 本会は史学・関連諸科学および、歴史・地理教育の研究
とその発展に寄与することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう。

一、研究会

二、大会

三、総会

四、機関誌等の発行

五、その他必要と認められる事業

第五条 本会は本会の趣旨に賛同するものをもって、会員とする。

2 会員は、本会の事業に参加し、機関誌の配布をうけ、機
関誌への投稿その他研究に関する便宜を受けることがで
きる。

第六条 本会は左の役員を置く。

会長 一名 委員 若干名 監事 二名

第七条 役員は会員の中から選出し、総会の承認を得るものとす
る。

第八条 役員の任期は原則として二年とする。

第九条 本会の経費は会費、寄付金およびその他の収入をもって
これにあてる。

2 会計年度は、四月一日より翌年の三月三十一日までとす
る。

3 本会の予・決算は監事の監査および総会の承認を得るも
のとする。

第十条 会則の改正は総会の議決による。